

内容を忘れた本をパラパラめくりながらだと仕事が捗らない。すべての本を棚に戻すのにいちいちそんなことをしていたら日が暮れてしまう。そんなことを分かっていたいながら、私は返却ボックスに投げ入れられた小さきまな本を眺めていた。こう見えて図書委員長だからしっかり仕事しなくちゃいけないのに、本への興味ばかりが先行して結局何もしていない。いつも図書委員会のメンバーに迷惑をかけてしまう。ただでさえ私の所属する図書委員会は、ゆるやかにその人数を減らしているというのに。

「蓮乃さん！」

カウンターの方から私を呼ぶ声が聞こえた。メイド服のスカートを翻してちょこまかと根府川あやめが走ってきた。図書委員会の副委員長にして私の良きパートナー。彼女が実質この曖昧な団体のリーダーで、私は彼女の意見に賛同しているだけだった。

「どうしたの、そんなに急いじゃって」

「あのー文化祭実行委員会に提出する参加申請書類って蓮乃さん持ってましたっけ？」

「いやーあれは山崎さんに託しておいたんだけど」

「山崎さんはこの間殺されちゃったじゃないですか。誰が持っているのかなーって思いました」

メイド服の襟を直しながらあやめちゃんは首を傾げていた。彼女がどうしてこの学校の図書館でメイド服を常に着ているのかはよくわからない。一度彼女にどうして学校の制服を着ないのかと尋ねてみたことはあるけれども、これが私にとってここでの制服なのよとよくわからない答えが返ってきたばかりだった。先生にも別段怒ら

れない私に不利益もないので彼女の衣服について私は一切口出ししなかった。あやめちゃんのメイド服姿はすっかりこの図書館の風景になっていた。

「たぶん山崎さんが持ったままだよ。まさかお墓まで拾いにいくわけにはいかないし」

「いくらなんでもお棺に文化祭申請書類はいれないでしょう。山崎さんがああいうお祭りが好きだったはわかりますけれどね。んーどーしましょうか、もう明日が期限なんですって」

「文化祭のメイド喫茶企画でしょ？ ちよっとやるには人数足りなくなっちゃったんじゃないかな」

「それもそうですね……騒々しい文化祭で唯一落ち着いた雰囲気の本を読みながらコーヒーが飲める所っていうことで毎年好評だったんですけど、あれをできないのはちよっと残念です」

「あやめちゃんいつもメイド服だからいいじゃない」

「まあ、そうなんですけどね。明日の会議で文化祭には参加しないことを正式に決めちゃいましょう。ちよっと最近人が殺されすぎです」

アガサクリステイの『そして誰もいなくなった』を握りしめながら彼女は囁いた。ここに来て図書委員会のメンバーは3人も学内殺人事件の結果命を落としている。犯人はもちろんわかっていない。今年だけで3件も殺人事件が起きているのにこの女子高は何も動くとしてないし、図書委員会の方もみんなで本の良し悪しを語りながらおしゃべりを続けるだけだった。メンバーが3人いなくなっているのをみんな忘れてしまっているようだった。きつと私が死んでもこの学校は平凡な毎日を続けていくのだろうと強く感じる。

「それじゃあ、明日の会議で待ってます。お疲れさまでした」

「お疲れさん」